

マイズウ・メーノス（まあーまあー）の世界 ブラジル

ブラジルを訪問する人、ブラジルに関心のある人にお勧めする！！

梅津 久 記

## 第24話ーアマゾンセがイタリアへ

2000年の7月、ブラジル人(アマゾンスーアマゾナス州生まれ)と一緒にイタリア出張に行った時に非常におもしろい事が一杯あったので、記録してみた。

7月といえば、南半球のブラジルは真冬であり、イタリアは南半球で真夏と思い、半袖等真夏の服装で、サンパウロの飛行場に行ったが、何と出発ロビーで待っている人達は、オーバー姿、ジャンパー姿がほとんど「これは間違ったかな」と思って、飛行機に乗るや否やすぐに雑誌を広げ地図をみた、何とイタリアのミラノは北緯で日本の北海道と同じ、「これはひょっとしたら寒いかもしれないな」と心配になってきた。気候状態を聞かなかったのはまずかったと後悔をしたが後の祭り、寒いイタリア旅行の始まりとなった。

イタリアの飛行場に着き、入国手続きでは、私は日本人パスポートですんなり入国できたのだが、同伴したブラジル人はイミグレで手間取っている、「何しに来たのか、ドルはいくら持っているか、ドルを交換した証明書はあるか」などとしつこく聞かれている、私と一緒に観光に来て、この予約したホテルに宿泊すると言って、入国出来た。次に手荷物検査、これはなんのシステムもなく、税関検査官が荷物を持って飛行場を出ようとする人を見ていて、抜打ちで旅行者を呼びとめて検査する。これも私はなんなく通ったが、彼は呼び止められバッグを開けさせられ、「どこに行くのか」とまた聞かれるありさま、これも私が「〇〇〇社のだれだれの所に旅行に来た」と行ってOKとなった。良く彼を見ると、たしかに色は浅黒く、目がギョロとしていてあまり人相が良くなく、麻薬の運搬人みたいに見えたのかもしれない。これは幸先の悪い第一歩となってしまった。

またイタリアの飛行場ではカート(トランクを運ぶ台車)は金を払わないと使えない。始めて訪れる人には習慣の違いの第一歩の洗礼である。わからなくて、並んでいるカートナーをカ一杯引っ張ろうとする人々の光景が次から次へと繰り広げられる。説明書はキチンとあるのだが、だれも金を払うものとは思わないから。隣にいるイタリア人の行

動を見て、初めてお金を払ってカートが使えることが分かった次第である。同じ様に、鉄道の駅でも、観光地でもトイレは金を払わないと使えない、お金がなかったらどうなるのだろうと考えると恐ろしくなってくる。

鉄道の話をする、ブラジルでは“ピッサッツ”といって、建物にわけのわからない落書きが多いが、イタリアでも全ての列車のボデーに落書きがされている、ブラジルと違うのはその落書きが非常に芸術的でいろんな模様の落書きになっていて見ても好感が湧き想像するだけで楽しくなる。また、列車はほとんどが個室になった列車が多い。

初日、仕事を終え、ホテルに戻り、夜8時に夕食に迎えに来るとのことで、ホテルのロビーで待っていたが、まだ日が高く、外は昼の明るさである、町を一回りして、レストランに着いたのが9時それでもようやく夕方になったかなという感じで、しばらくイタリアワインを飲みながら話をし、食事が運ばれてきた、10時頃ようやく夕日を見ながらの夕食となり、本当に異国に来ていると



筆者とアマゾンネセ（左端）とイタリアの友人（2000

実感出来た。また食事であるが、気の付いたことに、イタリア人（イタリアでは）食事の時に、ブラジル、日本のように清涼飲水を飲まない、ワインか、水またはビールである。またその水の種類が非常の多く“・・・サンタ”と神様の名前が付く。

ミラノの町での出来事、もう少しで金から、パスポート等の書類一式を盗まれるところであった。それは、一緒に行ったブラジル人と観光地を巡り歩いている、レオナルドダビンチの最後の晩餐の絵が置いてある教会の近くに来た所、真向かいから5歳から10歳位の二人の子供を連れた小さなチベット系の妊娠している女性が手の平にマットの様な物を広げて“アジューダ、アジューダ（助けて、助けて）”と言って近寄って来た、そして手作りのじゅうたんみたいな物を両腕に広げて私の胸に当てて来た、良くみたらそれは茶色になった古新聞ではないか、おかしいと思った瞬間、腹の前に置いたポシェットのチャックが開く気配を感じ、“オ、ケ、ボセ、ファス”と言って後ろに引き下がってポシェットをみたら、半分開いているではないか、脇にいた友人のブラジル人に

“気を付ける”と言って、この女性をののしった、それで友人はどうしたかなと見渡すと、彼は教会の広場の反対側で、他の観光客の間に混じってこちらを見ている、なんと情けない旅行の同伴者なのか。

もう一つは、丁度サッカーのヨーロッパ選手権の時期で、準決勝と決勝戦にかち合った。準決勝でイタリアが勝った時の町の騒ぎはブラジル以上で町の中心の広場では車の上の乗った若者で埋め尽くされ、またバスを強奪され、バスの上で氣勢をあげ、挙げ句の果てには火まで付けてしまっている。反対に決勝戦で負けた時は、それこそ鼠一匹通らない静けさ、食事に行ったレストランのボーイに声を掛けたが、怒ってお客である我々に食ってかかりそうな雰囲気になってしまった。

それから、イタリア(ミラノとベルガモしか知らないが)の町では、車を止めるのが大変である。それは駐車場がないからである、なぜないのか、古い建物の立て壊しが規制されている、道路から見る建物は昔のままに保護されおり、高さも4階位に統一されている。そのため駐車場を作るスペースがないからで、それで皆、路肩、また歩道が駐車場になってしまっている。ビニールカバーで覆ったまま歩道に駐車してあるし、廃車じゃないかと思われの車まで歩道に放置されている。またその車の傷みも先進国とは思えない程激しい、バンパーは紐でくぐられ、ウインカーはつぶれ、いたる所へこんだ車だけである。駐車する時は、ハンドブレーキをかけないで置くのだそうです、ピタリと着けて駐車し、出る時は前、後の車を押しやって出て行く。もっと変わっているのは、ガソリンポストまでが人々が往来する歩道の一部に何の囲いもなくコジンマリにポツン、ポツンとあるのです。

イタリアの公園、特に芝生のある処、足元要注意です。なんだかわかりますか？犬の糞です。「おい、そっち、ああこっち、おい右だ、左だ」こんな会話をしながら公園の中を歩くしまつです。もちろん、犬を遊ばせるために仕切られた場所はあるのだが、とにかく朝晩、住宅から沢山の人が犬を連れて散歩(犬の生理要求始末)に出てくる光景に出くわした。

また、帰国の空港での面白い事が。イタリアの空港では手荷物の大きさを制限するために、全ての手荷物をコンベヤーに乗せ、大きさを規制した枠(ゲージ)を通過しなければならない。友人であるブラジル人の手荷物は、いつの間にかパンパンに膨れ上がり大きくなって、どうにもゲージを通りそうにない、「おい、これやばいぞ、少し中

の荷物を減らせ」と云っている間、かれはコンベヤーの上にあがって、ゲージに引っ掛かり止まっているバッグをグイグイと強引に手で押さえ込んでゲージを通過させてしまった。とても恥ずかしくて見ていられなかった。彼は、親指を立てて俺に“OK”のサインを送って満足そうにしている。これも、イタリアに云ったマイゾウ・メーノスのブラジル人である。

帰りの飛行機の中は赤と白ワインを飲んでゆっくりと眠りこんでしまった彼でした。

—次号 25話へ続きます—